

〔課題演習抄録〕

中学校保健体育科におけるタグラグビーの導入 —運動有能感に着目して—

隈 本 真

Makoto KUMAMOTO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：タグラグビー，運動有能感（身体的有能さの認知，統制感，受容感），形成的授業評価

生徒の運動有能感の変化から明らかにすることを目的とする。

1 研究の目的

平成 29 年に公示された中学校学習指導要領（以下，新指導要領）においては，タグラグビーがはじめて例示された。今まで小学校にはタグラグビーが，高等学校にはラグビーが例示されている。今後，高等学校までの順序性を持った「タグラグビー／ラグビー」の指導の体系化が望まれる。タグラグビーの特性を早坂（2018）は，他のゴール型競技種目と異なり，ボールを保持したら防御されるまで走ることができ，さらに，比較的運動を得意としない学習者に対して，攻撃では防御を受けても速やかにほかの仲間にボールをパスし，チームのプレーヤーと連携してゲームを展開させる集団技能の向上に効果があるとしている。

また，新指導要領において「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」の育成が求められている。そのためには，生徒が運動の基礎技能や知識を獲得するとともに，運動の楽しさを実感し，自ら運動を実践するための内発的動機づけを高める必要がある。岡澤ら（1996）によると，内発的動機づけは運動有能感の高まりによって強められるとしている。この運動有能感は，3つの因子から成る。「身体的有能さの認知」とは，自己の運動能力，技能に対する肯定的認知である。「統制感」とは，自己の努力や練習によって，運動をどの程度コントロールできるかという認知である。「受容感」とは，教師や仲間から受け入れられているという認知である。これらを高めることによって，自ら生徒が運動を実践し，生涯にわたってスポーツや運動にかかわっていくことができると考えられる。

これらのことから，本授業実践では中学校保健体育科におけるタグラグビーの有用性について，

2 研究の計画

実施期間：平成 30 年 11 月～12 月 全 8 時間

対象：K 市立 S 中学校 1 年生 30 名

単元名：球技（ゴール型）タグラグビー

測定：運動有能感尺度，形成的授業評価

3 研究の内容

(1) 単元計画

単元を（図 1）の通りに計画した。

第1次		第2次			第3次		第4次	
1	2	3	4	5	6	7	8	
準備・集合・挨拶								
学習の流れ	学習の進め方の確認	オリエンテーション	三角ランニングパス		タグ取りゲーム		作戦タイム	
			パス練習		フォーメーション練習		チーム対抗戦	
	パスパスゲーム	グリッドゲーム(兄弟チーム)						
		3対1	3対2	5対5				
	道具やルールの確認	試しのゲーム	作戦タイム					
			メインゲーム					
	課題の検討	5対3		5対4	5対5			
		振り返り・学習プリントの記入・次時の確認・後片付け						

図 1 単元構想図

(2) 運動有能感を高める授業づくりの手立て

タグラグビーの特性と，他競技種目の運動有能感を高める指導法を参考に授業づくりを行った。

①身体的有能さの認知を高める手立て

達成カードの活用とゲームルールの改変を行った。達成カードは，日本ラグビーフットボール協会が提案しているタグラグビーにおける評価基準をもとに作成した。この基準をもとにチェック項目を作成し授業が進むごとにチェック項目が増えることで，個人の伸びが実感できることをねらいとした。また，ゲームルールの改変では，すべて

の生徒が直接勝敗に関われることをねらいとした。

②統制感を高める手立て

作戦タイムの設定と学習プリントの工夫を行った。作戦タイムでは、動きや作戦の工夫と成果の関係を学習仲間と交換するための場とし、成功体験により自分で運動をコントロールできるという実感を持たせることをねらいとした。学習プリントでは、考えたフォーメーションの前後の違いを視覚的に理解させ、それをゲームの勝敗とつなげることをねらいとした。

③受容感を高める手立て

兄弟チームと日替わりキャプテンを取り入れた。これにより生徒同士の認め合いによる肯定的な雰囲気を作り、学習の進め方や、競争場面の役割分担等を明確にすることをねらいとした。

4 成果と課題

(1)運動有能感の変化

運動有能感尺度を実践前後に測定した。それらの結果を運動有能感と構成する3つの因子の実践前後の平均得点と標準偏差で算出し、これらのデータについてt検定で検証した。その結果、運動有能感と統制感で有意な差が見られ、単元後のほうが高い値を示した(表1)。このことから、単元後において、自己の努力や練習によって、運動をコントロールできるという認知が高まったと考えられる。この結果は、今まで経験が乏しく、且つ、ルールが複雑なタグラグビーが最初は難しいと感じていたが、作戦タイムの設定や学習プリントの工夫によって、自己の統制感が高まったと言える。しかし、身体的有能さの認知と受容感については有意な差が見られなかった。このことから、身体的有能さの認知と受容感を高めるための手立てがあまり有効に働かなかったのではないかと考える。また、受容感についてはもともと生徒同士の学び方や肯定的な雰囲気が構成されており、実践前から高い状態であったと考えられる。

表1 運動有能感の各因子の平均値とSD及びt検定結果

N=27	単元前	単元後	t値(df=26)
運動有能感	42.33(9.71)	44.59(10.73)	-3.34*
身体的有能さの認知	11.22(4.12)	11.78(4.75)	-1.56
統制感	15.56(3.86)	17.04(3.95)	-3.26*
受容感	15.56(3.04)	15.78(3.75)	-0.54

*p<0.05

(2)形成的授業評価の経時的変化

毎時間授業後にとった形成的授業評価(図2)

は、単元が進むにつれて4つの観点全てで向上しており、授業が順調に進行したといえる。特に技や力の伸び、新しい発見、感動体験を示す成果観点において大きな変化が見られた。これは、技能的な達成や習熟を示していると考えられる。特に5回目の授業に早歩きゲームを取り入れたことによって、大幅に向上していることがわかる。今までボールに触れられなかったり、タグを取れなかった生徒が活躍し、試合の勝敗にかかわれたと実感したことが影響したのではないかと考えられる。

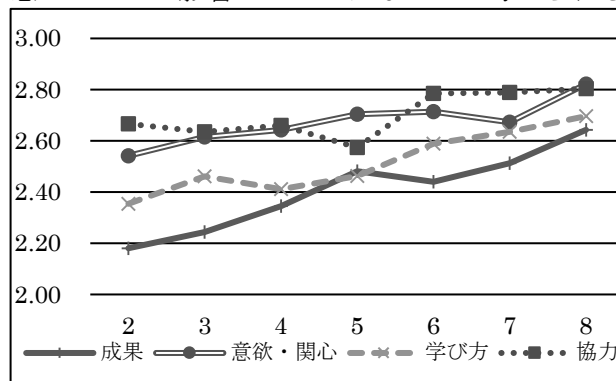


図2 形成的授業評価の経時的変化

以上2つの成果から、中学校保健体育科におけるタグラグビーの有用性はあり、導入する意義があると考える。

(3)今後の課題

実践を通して男女共習の難しさを感じた。心身共に成長期を迎えている中学生において、男女のスピード差が感じられた。また、異性のタグを取ることに抵抗がある生徒も見られた。今後、男女差を考慮したチーム編成の手立て等が必要だと考えられる。さらに、中学生になると小学生に比べゲームのスピードが増す。そのため、タグを取る際の指の怪我等への十分な安全面の配慮と指導が必要である。また、本実践では1年生対象のため、小学校のタグラグビーを参考に授業づくりを行った。しかし、これ以降の「タグラグビー／ラグビー」の指導の体系化を考えると身体接触が含まれる等の高等学校への接続が課題と考えられる。

主な引用・参考文献

- 早坂一成 2018 前期中等教育(中学校第1学年及び第2学年)におけるタグラグビーの指導法と普及に関する考察 名古屋学院大学教職センター年報 第2号: 55-63
- 文部科学省 2017 中学校学習指導要領解説保健体育編 東山書房
- 岡澤祥訓ら 1996 運動有能感の構造とその発達傾向及び性差に関する研究 スポーツ教育学研究 16(2): 145-155